



映像インスタレーション作品：SYUHO PEAR TREE

映像インスタレーション

2020

《SYUHO PEAR TREE》は現在私が制作している映像作品で、2019年に山口県の秋吉台国際芸術村で撮影した《平成三十一年二月秋芳梨樹》と、今年撮り始めた台湾の横山郷の寄せ接ぎ梨生産者に関する映像で構成されています。本作品は12月に台北国際芸術村で公開されます。



上：2019年の映像インスタレーション《平成三十一年二月秋芳梨樹》

2019年、私は台北国際芸術村の交換プログラムを通じ、日本の山口県にある秋吉台国際芸術村を訪れ、2カ月以上滞在しました。私にとって初めての長期にわたる田舎暮らしでした。冬の終わりから春の初めという季節的なものと、その地域の環境によるものなのか、そこに長期滞在しているアーティストたちは誰もが朝から晩まで食欲旺盛で、小規模農家が経営するスーパーで買ったあらゆる農産物をペロリと平らげていました。地元で採れた立派なゴボウやサツマイモは、蒸したり茹でたりするだけで非常に美味でした。食料をサプライチェーンの末端で買うことに慣れている消費者の私は、木の葉が落ちた冬の間、家、道路、森といったなじみのある物が、キノコが生えかけている丸太、人知れず実をつける菜園、あらゆる種類の果樹と混在している風景を目の当たりにすることができました。

芸術村を出てすぐ、直進したところ、あるいは2本先の道をUターンして3～5分歩いた先に梨畑がいくつかあり、小道を上って丘を越えた先にも畑がありました。梨の

木は、私が想像していたよりずっと丈の低いものでした。放射状に広がる根のように、枝は小枝を互いに交差させながら、きれいに組まれた格子状の棚の上で両側に長く伸びていました。本来は高くそびえる梨の木は、棚によって高さが抑えられ、梨畑の中でチェスの駒のように整然と並ぶことにより、栽培や収穫がしやすくなっていました。畑の横を自転車で通り過ぎる時、誰の姿も見えないのに広大な梨畑のどこかからラジオの話し声や音楽がかすかに聞こえることがよくありました。とある広大な梨畑では、遠くの方にたった2人の男性がせっせと作業をしたり、必要な時には他の畑を手伝ったりしているのが見えるだけでした。山を背にした穏やかで寂しい冬の光景を見ると、都市部とは全く違う緻密で複雑な時の流れを感じました。



左から：秋吉台国際芸術村近くの梨畑

秋吉台国際芸術村は近隣住民と良好な関係を維持しており、住民の多くが毎年、アーティストによる滞在制作に参加してきました。住民の支援を受け、私は梨畑の所有者である井上さん一家、堀永さん、佐々木さん、地元生産者の組織である農協の人々（秋芳梨生産販売協同組合の永嶺さん）、そして地元農業の長期開発を担当する農協（Jusan Agricultural Cooperativeの吉村さん）の皆さんにインタビューしました。農業界で生き残るために、生産者の皆さんは梨の栽培と選果に厳しい基準を設け、独自のブランド梨「秋芳梨」を開発しました。その流通経路には東京・新宿の高級フルーツ店が含まれるまでになり、梨は秋の人気果物として定着しました。滞在中、私が出会った生産者は皆さん高齢でした。農協が丸いカラーシールで手作りした人口統計表では、グラフの線が地理の教科書に載っている高齢化を示す人口ピラミッドのパターンのように、花瓶を逆さまにした「つぼ型」になっています。



この村唯一の若い梨生産者は、梨栽培を始めてまだ間もない、大阪出身の常盤さんでした。常盤さんは農作業を続けられなくなった畑の所有者から梨畑を引き継ぎました。インタビューの間、常盤さんは、ただ梨を購入して食べるだけでは一生知ることができないようなことをたくさん話してくれました。私にとって最も意外だったのは、梨栽培とはゴールのないマラソンのようなもので、一瞬でも立ち止まれば梨の木が病気になる、近くの畑を汚染する原因にもなってしまうということでした。梨が育たなくなれば、その区画の梨の木をすべて切り倒さなければならず、土壌を浄化したり再生したりすることは不可能です。秋吉台の広大な土地で梨畑の開拓が始まったのは約1世紀前で、梨畑の半分以上はすでに消失しました。中には3世代にわたって栽培され、豊作を続けながら樹齢100年を超える大木に育った木々もあります。そのような成功の陰には、明けても暮れても日々の栽培工程を厳しく守り続けてきた生産者の姿があります。梨栽培のために大都市・大阪から移り住んできた常盤さんは、一年中回り続ける歯車のような梨栽培の工程をこなし続けていました。彼は毎日の暮らしを「梨時間の世界」に合わせたのです。



左：「秋芳梨 百年の樹」の缶詰、1缶 500円。1缶買いましたが、とても食べることなくってできません。

出典：<http://minecolle.com/nashi.html>

グローバル化された協力モデルのもと、台湾の「梨時間」は奇跡的な複合製品へと発展しました。亜熱帯気候の横山郷で栽培される「粗梨」というニックネームの在来種の梨には甘みも柔らかさも足りないという不満が出てから、大きな気温差と梨生産者の高度な接ぎ木技術を頼りにした画期的な試みとして、日本から買い付けた穂木を使った日本の梨の栽培が行われています。



緯度経度の制限を乗り越えるにあたり、大きな気温差を頼りにしただけでは必ずしも低温を保てず、温帯梨の供給量を安定させることができません。いくつかの試みを経て、生産者たちは気温が高くても栽培できる横山郷の梨の木に日本の梨の木を接ぐことができると気づきました。剪定と接ぎ木を毎年続けるのは長期間にわたる労働です。梨の樹木、花、果実をそれぞれ個別に管理された時間枠の中で栽培し、海上輸送を経て別の場所に移送し、その後数日かけて剪定を行ない、ようやく「商用梨」と呼ばれる複合製品となるのです。しかしながら、農地を通り過ぎる観光客が目にするのは、単なる田園風景だけです。

都市部で暮らす人々は、旬の時期に市場に搬入される梨やギフトボックスに詰められて台湾に輸入される梨を含め、都市部を支えているあらゆる体制は完璧な方法で運営されていると思っていることでしょう。生産者から市場に運ばれる過程として想像できるのはほんの3〜5段階であるのに対し、実際は搬入までの数百キロに及ぶ過程は多くの段階に細分化されます。梨は落葉処理や接ぎ木、冷蔵と貯蔵、陸上と海上の輸送、輸入、輸出、関税手続きといった自然と人間、または人間同士の関わり合いを経て、再構築されたイメージのもと販売されています。これらはすべて、時期や樹木を巧みに調整する生産者たちの手仕事の産物であり、単なる食物を超えた存在ですが、都市部に暮らす一般消費者はこうしたシナリオを想像することはおろか、目にすることもありません。

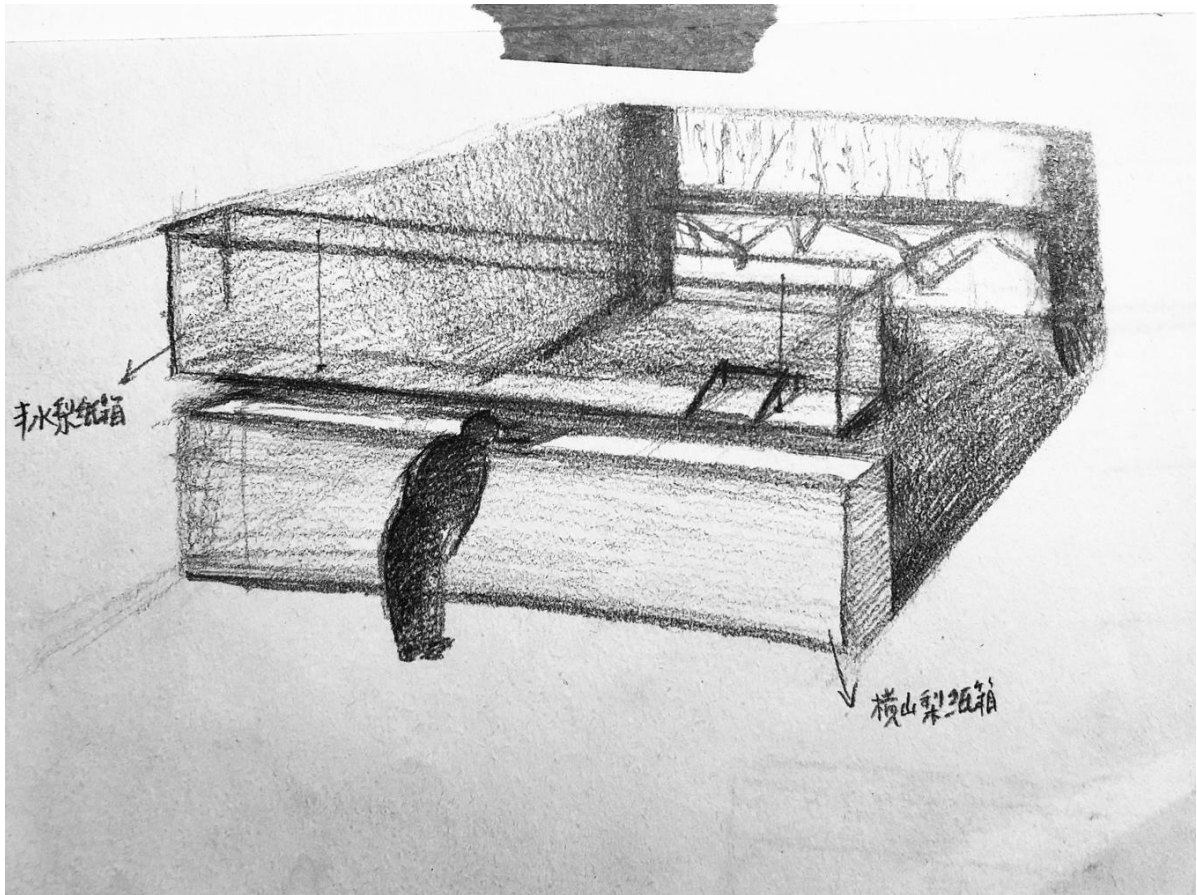
現在も続いている時間をベースとした工程は、歯止めがきかない農業人口の減少、梨の接ぎ木栽培が非常に骨の折れる難しい技術であることによる後継者問題、そして自然災害によって穂木が容易に入手できなくなっていることなどにより、過去10年間で非常に大きな影響を受けてきました。たとえば、福島は台湾にとって穂木の重要な輸入元のひとつですが、2011年以降は以前と同じ輸入量を維持することが不可能となりました。そして新型コロナウイルスの感染拡大により、台湾の接ぎ木栽培業者が日本へグループ渡航することもできなくなっています。国をまたいだ支援体制の混乱が作物に及ぼす影響は、消費者には比較的に見えにくいものです。



左：接ぎ木された梨の木には無数のこぶがあります。こぶの切り目は、横山郷の梨生産者たちが何十年にもわたって日本からの穂木を接ぎ木してきた痕跡です。

右：今（9月）は横山郷の生産者たちが、生き生きとした若枝を母樹に接ぎ木する時期です。接ぎ木する枝を選び、日光を求めて上に伸びようとする他の枝を剪定します。そうすることで後の工程が効率化されるだけでなく、接ぎ木のための栄養も保たれます。剪定後は、木の上部と下部の対照が明確になります。

今後2～3カ月の間、私は苗栗県横山郷で、寄せ接ぎ梨生産者による煩雑で創意工夫に富む接ぎ木の工程、農作業の合間のありふれた日常や神秘に包まれた瞬間を撮影して過ごします。しかし、これは研究目的のドキュメンタリーでもなければ、農産物の生産を描いたプロモーション番組でもありません。私の目的は、生産者の仕事の忙しさを伝えることではなく、梨の木をきれいに整える作業（接ぎ木された梨の木には無数のこぶがあります）、穂木を接ぎ木する合間におしゃべりをする様子、生産チェーンのゴール、すなわち「梨」という製品を消費者に届けること（理想とかけ離れた価格の場合、しばらくの間梨を貯蔵しておく必要があります）といった梨の旅の行程を、反復的なフレーミングやリアクティングなど、自身の撮影手法にもとづいて撮影することです。この映像作品は、日々の活動を中心に、驚くべき接ぎ木技術や現代社会の様々な地域と時代をまたいだ複合的な工程を記録しながら、そこに関わる多くの人々の人生を軸に展開します。生産者たちの喜びや苦労、農産物の生産だけでなく、都市政策や国境を越えた活動にも触れます。完成作品がどのようなものになるのか、コロナ禍でどの程度の撮影が可能なのかも分かりませんが、これが現在、私が取り組んでいる映像作品です。



上：台北国際芸術村で展示された映像インスタレーションの1つ。作品の下部を包み込んでいる壁は、台湾で最も多く栽培され、食感の不人気によって売り上げが減った横山郷の梨の紙箱を積み重ねて作られています。上に吊られているのは「豊水」、「幸水」、「新世紀」など、接ぎ木に使われた日本の品種を入れるのに使われた紙箱です。その間に小さな隙間が作られています。上部には梨畑、下部には接ぎ木作業などを行っている生産者の様子を、紙箱の異なる面に設置された隙間から見ることはできますが、他の部分は覆われていて木々がかすかに見えるだけです。